


## 易とは何か (61・7・19)

本田 濟 (昭15文甲)

本日は「易とは何か」という演題でお話します。世間でよく易占うらないが行なわれております。これはいかなる大道易者がやるにいたしましても、ちゃんと典拠は中国の古典えききょうの易経、多かれ少なかれその古典の易経に基づいて判断している訳でございます。易経という書物は、ちよつと広告になるかもしれませんが、朝日新聞社の中国古典選せん、これの中に私が書きました易というのがございます。上・下二冊からなつてまして、全訳でございます。

易という書物は一番古くは占いのテキスト。筮竹せいちくの操作によつて出てくる六十四種の卦けに、それぞれ判断の文句をくつつけたのが、易経の一番もとの形であります。その判断の文句というものがどういふものであるかという点、例えば  「乾けん」という卦けがあります。切れ目のない棒が六本並んでゐる。「乾」とは、乾坤こんの乾、天の意味です。その判断の文句が「元もといに亨とる、貞ただしきに利あり。」

非常に簡単な言葉ではありませんが、これが卦全体の判断です。

ところで、ひとつの卦は六本の棒からなっておって、ひとつひとつの棒にまた文句がついている。乾の卦について見ますと、

初九（一番下の棒）「潜竜せんりゆうなり。用いる勿なれ」。

九二（下から二番目）「見竜けんりゆう、田に在り。大人を見るに利あり」。

九三（下から三番目）「君子は終日乾乾。夕べまで惕てき若じやくたり。厲あやうけれど咎とがなし」。

九四（下から四番目）「或いは躍あそって淵ふちに在り。咎なし」。

九五（下から五番目）「飛竜ひりゆう、天に在り。大人を見るに利あり」。

上九（一番上の棒）「亢こう竜りゆうなり。悔くゐ有り」。

筮竹で卦を立てる場合、六十四通りのうちのどれかの卦が出る。例えば乾の卦が出れば、「元もといに亨あやむる、貞まことしきに利あり」という文句が、その人のおおまかな運勢を示す。それと同時に全体の卦の何番目の棒かが、筮竹によって指定される。それに附せられた文句は、その人の現在のシチュエーションを、よりこまかく示す。かような占いのテキストが易のものと姿です。

その後、単に占いというだけでなく、これに何らかの道徳的な、倫理的な説明を加えたのが、孔子であります。その結果、この易経というものは、単に占いのテキストというだけでなく、何らかの倫理的な教訓書、処世の教え、ないしは、陰陽の二元による宇宙論的哲学となります。

陰と陽というのは、この八卦の形を見てもらったらわかりますが、真中のつまっている棒と、真中が切れている棒とがあります。つまっている方が陽。電気で言えば、陽電気。それから、真中が切れているのが陰。陰陽は、まあ陰電気と陽電気だと思えば、間違いない。陰と陽との絡み合いが、あらゆる物を作り出すという、二元論的な宇宙観。これが易全体を貫いて、一つの形而上学を成り立たせている。これは、孔子のくつつけた解説部分に見える、高度な哲学です。孔子の作った解説の部分が、全部で十卷ありまして、これを十翼、十の翼と言う。翼と言うのは、助ける、本文の意味を助ける、という意味であります。その十翼の中でも『繫辭伝』、上下二卷ありますが、これが易全体の哲学というか、そういうものを構成する、非常に重要な、中国の哲学史の上でも重要な書物になっております。そういうあれをくつつけまして、易というものは、単に占いという、今から言えば、迷信的な昔の人は、大真面目だったんですけれども、あるいは神秘的な呪術というだけでなく、一つの哲学書となった。哲学書になる事によつてですね、易経は経書の列に入る。孔子の時代までは、経書として確立しておいたのは、まあ書経と、詩経と、礼記の元の形。まだ文句のついていない礼儀の規定。そういうものしかなかったものが、孔子の十翼、これを付け加える事によつて、易経が五経の一つ、しかも五つの経書の中のトップに躍り出る事になった。



五つの経書というのは、易経、書経、詩経、礼記、春秋。中国の昔の人は、五つの経書で、あ

らゆる真理を尽くせると考えている。經書の条件というのは、すべて聖人が作ったということ。聖人の作った書物。あらゆる真理がその中で充足している。まず西洋の社会におけるバイブルにあたるのが經書だと思えばよろしいんです。易經は、ですから、現象学とか、形而上学。書經というのは、帝王の言葉を集めたもので、これは政治哲学。詩經は文学論。それから礼記、これは、礼儀作法を教える書物で、まあ倫理学。日常の倫理。春秋と言うのは、孔子の作った歴史書で、これは、歴史哲学であります。

で、易は、今申しましたように、經書の一つ。それも經書のトップとして数えられる。そういう地位に上がりましたものですから、昔から、いろんな人が愛読した。これは、儒者だけじゃありません。我々、日本人のボキャブラリーの中にも、いろんな、易經の中に有る文句がある。日常、思いがけない所で、何とも思わないうで使っている言語の中に易の文句がある。例えば「虎の尾を履む」。危険な事の形容に、虎の尾を履むという。これは履むという卦、履は踏むという意味ですが、この卦の文句です。

我々三高におりました者として思い出に残っておりますのは、三高の建て物の中に、「新徳館」という建物がありました。それは易經の繫辭伝、孔子の作った繫辭伝の中に、「日新をこれ、盛徳」といふ。これは、天の働きを形容した文句でありまして、その前の句は「富裕をこれ、大業」といふ。その後「日新をこれ、盛徳」と続く。この二句は天の働きを述べておりま

す。「富裕をこれ、大業という」、天というものは、宇宙のあらゆる物を、創造する。つまり、天の生み出す物というものは、非常に、豊かである。それが天の大きな仕業である。天の働きは、日々、新たである。太陽が西に沈んで、それで終わりになるんじゃあない。明るる日には、また新しい太陽が、東から昇る。そういう風に、日々に新たな働きが、天の盛んな徳というものである、という意味。「日新をこれ、盛徳という」、その「新」という字と、「徳」という字。これらの組み合わせで、多分「新徳館」と名付けたのであろう。

「尚賢館」という建物も、ございました。さつき伺いますと、荒れはてて、今や見る影もないところでありますが、「尚賢」という字は、易経に二度出て参りまして、繫辞伝に一回。それから「大畜」という卦にも出て来るんですけども、まずわかり易い方で、繫辞伝。繫辞伝の中に、「大有」という卦。大有とは大きな所有という意味ですが、この卦の一番上の棒を説明して、「信を履み、順を思い、又た以って賢を尚ぶなり」と申しております。大有の卦  の一番上の地位にある人、この人は、信義を履み行い、それでいて下の者に素直であろうと思う。「また以って賢者を尚ぶ」、賢者というのは、すぐ下における陰の棒を指す。陰とは時に、下位者であり、妻である。そういうものを、陰は、象徴するのでありますが、自分は、最高位にありながら、信義を履み、それから、素直であろうとこい願ひ、下々の賢者を尚ぶという。これが、大有に関しての説明として、繫辞伝の中に見えます。また、大畜  という卦にも出てまいります。孔子

の説明なんですけれども、「その徳、剛上りて、賢を尚ぶ」という。大畜というのは、大きなものを養うという意味で、この卦の徳は、「剛」。「剛」というのは、真中の詰まっている棒、これが「剛」でありますが、これが上の位置に上がって、しかも、下の賢者を大切にしているという下から四番目と、五番目の陰の棒が、その賢者に当たるわけです。そういうふうな、上位者が心掛けて、下の位の優れた者を尊敬する、それを「賢を尚ぶ」といいます。

「賢を尚ぶ」という言葉は、儒教の側だけでなく、墨子ぼくしという、これはまあ、儒家とは反対の派ですけれども、こういう人も、賢者を尚べとやかましく言います。「尚賢館」と名付けた人はおそらく儒教的な経典、易経の中の「賢を尚ぶ」、これを用いられたに違いない。老子の中にも「賢を尚ぶ」という言葉は出てくるんですけれども、老子は、逆に、賢を尚ぶな、と言う。老子は、文明否定であります。民を無知にしてやる事が、民にとっての幸福であると考えたから、賢を尚ぶとそういうような事を、支配者はするなと言うのであります。老子という人は、儒教に対するアンチテーゼとして出て来た人ですから、そういう逆な事を言うわけでありまして。

さて、易の一番元になるのは、文句の前にある六本の棒から成る卦、これを上下に分けた三本の棒から成る卦であります。俗に「八卦」と申します。☰、☱、☲、☴、☵、☶、☷、☸、☹、☺、☻、☼、☽、☿、☽、☼、☻、☺、☹、☸、☷、☶、☵、☴、☲、☱、☰。陽の棒が三本からなるのが「乾」。これは、純粹に陽性なもの、男性的なもの、天。それと正反対なのが、真中が切れている形。これが三本組み合わされたのが「坤」、大地。一陽

○ 八卦

兌 	艮 	離 	坎 	巽 	震 	坤 	乾 
沢	山	火	水	風	雷	地	天
少女	少男	中女	中男	長女	長男	母	父
悦	止	附	陷	入	動	順	健
羊	狗	雉	豕	鶏	竜	牛	馬
口	手	目	耳	股	足	腹	首
西	北東	南	北	南東	東	南西	北西

と 陰の形が何を意味するか。これはいろいろ説が有りまして、郭沫若<sup>かくもく</sup>という中国の学者は、真中<sup>まなか</sup>が塞<sup>さい</sup>がっている、すとしたのであれば、男性の生殖器のシンボルである。真中の切れているのは、女性生殖器のシンボルである。こういう風な説を立てておられますけれども、はたして当たっているかどうか。それよりは、ごく簡単に、奇数と偶数、つまり、一と二、奇数と偶数とする説の方が、当たっているんじゃないかという気がするんですが。その次、陰が二本、下に陽が一本で、「震」<sup>しん</sup>。これは、雷<sup>かみなり</sup>。それから、陽が二本の下に陰が一本ある、これが「巽」<sup>そん</sup>。ソ、ンと発音し


ますが、「巽」という字。これは風を意味する。それから、陰が二本、その真中に、陽の一面が有る。これは、「坎」という名前、水を意味する。雷や風になぜなるか、易経の中で、色々説を立てていますが、もう一つ、あまりはつきりしたあれはない。この「坎」が水であるというのが、一番分かるんで、☵ を縦にしたら、「水」という字の古い形に似ている。昔から、だから、これが水に当たると言う。それと反対の形が、「離」。離れるという字ですが、両側が明るくって、真中が暗い。これは火。蠟燭の炎やなんかを、考えればいい。それから、陽が上に一本、下に二本陰が有る。これは、「艮」。ゴ、ンと読みます。ウ、シ、トラという字。「艮」、「巽」というのは、方角を意味する字ですけども、八卦はそれぞれ八つの方角をも示す。「艮」が山と、いうのは、その形を見たら、ちょうど山のように見立てられる。それと反対の、最後の「兌」。兌換券の「兌」。これは、沢。下が二本陽で、上に切れ目のあるのが一本乗っている。

八卦というのは、表に挙げたのは一部分で、これを原点に、無限にいろんなものを象徴する事ができる。一番普遍的な象徴は、自然現象としての天・地・雷・風・水・火・山・沢。これを家庭内の人間関係で申しますなら、「乾」は、純粹に陽なるもの。純粹に強いもの。これは父。「坤」は、純粹におとなしい。純粹に柔らかな、という意味で、母。それから「震」、八卦は下から上へ見ていくので、三本のうち最初の棒が陽、男性であるから、これは長男。それから、「巽」は、三本の中の最初、つまり、一番下が陰、女性であるから、長女。以下、「坎」は、二



番目の男の子。真中の男の子。「離」は、真中の女の子。「艮」は下から三番目が、初めて陽になるので、三人目の男の子、末の男の子。「兌」は、下から三番目が、初めて陰になりますから、三番目の女の子。末の女の子。その他、働きで言いますと、「乾」は健やか。「坤」は素直。「震」は、動く。「巽」は、入る。それから、「坎」は陥ちる。「離」は、くつつく。それから「艮」は、留まる。「兌」、これは、「リッ」を付けたら、「悦ぶ」という字になるので、そのような性質の徳性を持ちます。動物に当てるなら、「乾」は、一番健やかという意味で、馬に当たる。「坤」は、大人しいという意味で、牛に当たる。あと、竜・鶏・豕・狗・羊、こういうものが、それぞれの卦に割り当てられる。肉体の部分で言えば、「乾」は「父」でありますから、頭に、「坤」は、母でありますから、腹に当たります。ほか、足とか股とか耳・目・手・口。それから方角にしますと、「乾」、これは、乾の方角。イヌイと読みます様に、西北。以下、西南、東、云々、という風に、割り当てられる。

八卦のシンボルというものは、無限に展開しうるもので、それぞれの属性に従って、いろんなものに割り当てられる。この八卦、万物を象徴しうる八卦を、上、下に組み合わせる。六本の棒を組み合わせる事によって、より複雑な、何らかの人生の中のシチュエーションというものを、象徴する事ができる。六十四通り有るわけですが、そのいくつかを、挙げておいた。

最初に、「かん威」。下に、心という字を付けたら、感動するの「感」と同じ意味でありま

○ 六十四卦の例



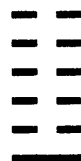
咸 (男、女に下る)



睽<sup>クイ</sup> (二女同居)



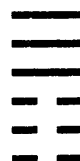
解 (雷雨おこる)



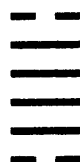
復 (雷、地中にあり)



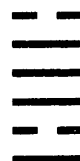
泰 (天地交わる)



否 (天地交わらず)



大過<sup>ダイカク</sup> (棟 たわむ)



革 (水火相い息<sup>ソク</sup>す)



明夷 (明、地中に入る)




節 (沢上に水あり)



すけれども、これは、なぜ心が下に付いていないかという、易経の注釈では、無心の感動。「感」という字は、心あつての感動。その心を取ってしまうと「感」になる。無心の感応を、「感」と言う。この卦は、易の解釈によりますと、「男、女にくだる」。この卦の形、上半分と、下半分を見て頂くと、下三本、☷は、さきの表で見られます様に、三番目の男の子、年の若い男の子。それが下における。それから上の三本、☰は上の表で見てくださいと、三番目の女の子、若い女の子。つまり若い男の子と若い女の子の組み合わせです。中国は男尊女卑の国と言われますけれども、易では男が上に立っていばつておったんでは、そういう両性の間の感動、感応というものが得られない。男の方が女にへりくだる、そうすることによって両性の間の感応が生まれ、家の中がうまくいくという。

次に☱☱「睽」。これは、目をそむけ合うという字であります。易経の説明に、二女が同居すれば、その志がぴたりいかない、目をそむけ合うという。これの下半分☷は、若い女の子、上半分☱は中の女の子。ということは女の子が二人おつて二番目の女の子と三番目の女の子、あるいは大家族のことでありますから、次男坊の嫁さんと三男坊の嫁さん。そういう二人が家政を取り仕切る場合、必ずや目をそむける、けんかになる、という。そういう世態人情を易経の作者はのべているのであります。

次の行☳☳「解」、解決の解という字。これには「雷雨おこる」という文句が説明について

おります。上半分が雷。下半分は水でありますからこれが雨にあたります。長い冬の後、はじめ雷が鳴って、ザーツと雨が降ってくる。そうすると、今まで凍っていた大地が解けて、ようやく世間全体が温かになってくる。そういう意味で、氷が解けるといふことで解。

その次の  「復」。一番下に一本だけ陽の棒がありまして、上五本が陰であります。この卦には「雷、地中にあり」という説明がついており、これがちょうど冬至の日、旧暦の十一月に当たります。これはつまり、天地全体が陰気で閉ざされておるところへ、陽気もどってくる。そういう時を示します。俗に一陽来復と申しますが、一陽来復の一陽は、一番下の、一本の陽の棒のこと、雷が地中であつてはじめて動く、これからだんだん日が少しずつ長くなる。つまり陽気が復かえってくるという。これは非常に目出たい卦であります。

 「泰」と  「否」。これは、組み合わせせて見ていただくと、わかると思いますが、易経の作者は非常に皮肉なものの考え方をしております。皮肉というか反体制的というか、昔の階級社会においては、多少、危険な思想。この「泰」といふ卦、これは上半分が大地で下半分が天。天が地の下に降りておる。言い換えれば、君主が人民の下におる。つまり、君主と人民の地位が逆転しておる。天と地の位置が、逆転している。これは不都合のような形に見えますけれども、易の作者はこういう天と地がひっくり返って、はじめて天と地が交わる、天地の気、お互いの気が通ずるといふ。泰という字はやすらか。泰平の泰ですけれども、これは通ずるといふ意


味です。

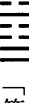
それと反対にです、次の「否」の卦。これは、上三本が天、下半分が地。つまり天が上にあつて地が下にある。これでこそあたり前のように思いますけれども、易の作者は、それでは天と地が交わらない。言い換えれば、人間関係で言いますと、上半分は君主で、下半分が人民である。君主が上でふんぞりかえつていて、人民が下で縮こまっている。これではお互いの感情が通じ合わない。これは良くない。否という卦の名前、これは塞がるという意味です。これは何と言いますか、古代の階級制が厳しい時には、革命的な考え方で、易の作者は、こういうシンボルを用いて独裁制を皮肉っておるわけです。

易の作者は、革命ということをはっきりみとめております。武力革命、悪い君主がおれば、それを徳のある家来が打倒してもかまわないという。これは、孟子の中に歌われているあれですけれども、すでに易の中で、革命という事は、肯定されています。☰☲「革」。革命の、「革」という字。これは、改まるという意味です。革命というのは、天命が改まるという意味ですが、この卦、下半分が火。上半分が、沢。易経の説明では、水と火が、激しい勢いで伸びて、それが戦い合う。それが、革命。しかも、革命というものは、易経の説明では、天の意志に従い、それから、人の心に従う行為であるという説明が加わっております。

その前に☰☱「大過」という卦を挙げました。これは、大いに過ぎるという意味。これは、

上半分、下半分と分けて見るのでなくて全体の形で見ると、六本の棒のうち、真中の四本が陽。一番下と一番上、つまり両端が陰である。つまり、真中の四本は屋根に当たるのでありますが、これが強い、重い。両端の柱が弱い。その結果、棟木がたわむという。そういう文句が、易経の原文についておる。これは、六本全部の形、卦全体の形から、そういう判断をしています。

最後の 、「明夷」<sup>めいゐ</sup>。これは、難しい名前前の卦であります。「夷」<sup>ゐ</sup>は、滅びる。「明」<sup>めい</sup>が滅びるという意味。「明、地中に入る」という説明がついています。これ、下半分が、太陽。上半分が、大地であります。大地の下に、太陽が、くずおれて、地中に潜んだということ。これは、殷と周との革命の時に、殷の賢人が、野に隠れた。それを意味する、という説明が有ります。これは、つまり、世の中の悪い時。卦としては、非常に悪い卦であります。


それから、「節」という卦。「沢上に水あり」。下半分が、沢。上半分が、水。沢の上の水が加わるので、度が過ぎると、沢が溢れることになる。節度がなければいかんという。これは、節約の徳を説いた卦ですけれども、池の上に水という、そういう形で、水をあまり浪費したら、池が溢れる、という風な、形をこれで示しておる。

こういうわけで、六十四の卦、ここでは、一部分をあげましたが、それぞれに、卦全体の形、卦の題名からでも、善し悪しが、はっきりわかるのがある。始めのほうの睽、目を背けあう。これは、もうはつきり悪いあれで、真中ごろの、「否」という字。塞がるという、これもまあ、非

常に悪い。それから「大過」、これも良くない卦です。「革」、これは中国人の感覚では、革命の時というのは、世の中全体が新しくなるので、良い方の卦。最後のほうの「明夷」、これは、悪い時代。それから、最後の「節」。これは、いわば教訓的な卦であります。こういう卦が出たら、今のその人の、だいたいの運勢というか、長い時間のその人の運勢。そういう事を意味すると同時に、これは、教訓でもある。最初の「咸」という卦が出たら、これは、占った人に対して、細君にあまり当たりちらしてはいかんと、中では、細君を立てて、自分は遜るようにしろ、という教訓でもある。それから、すぐ隣の「解」。それが出れば、その人の抱えている悩みは、遠からず、解決するであろうという、そういう判断でもあり、それからまた積極的に、行動せよという励まし判断ともなる。あと、「天地交わる」の卦。あるいは、「天地交わらず」の卦。これは、すべてそういう意味で、判断でもあり、倫理的な教訓でもあります。

陰と陽というのは、さっき申しました様に、陰電気と陽電気、そういうような、万物を構成する二つの気。中国の哲学では、物質を構成する、あらゆるものを構成する物は、気であります。この「気」という字は、中に、米を書くのは、後から出来た字で、一番古い形は、米がないんです。これは、水蒸気の立ち昇る象形。気体の意味。これが凝縮して液体になる。液体がさらに凝縮してはじめて固体になるわけです。気というものには、陰と陽、二つの属性と言いますか、種類というか、そういうものが有る。陰という字。これの元の意味は、偏の方は、丘。丘をたてに

した形。旁つくりの方の上半分は、今という字。キンの発音を示す部分。頭のK音はおちてしまうので、インになるのです。旁の下半分は雲。一方の、陽の字は、丘の上に太陽が有りまして、地平線の上に、太陽があがっている。旁の下に有る勿は、旗。旗竿のぼり。幟のぼりです。陰陽というのは本来は、丘の陽の当たらない影っている部分と、それから、陽の当たる部分。そこから山の北側が、陰。山の南側が陽。山陰とか、山陽とかいう言葉を日本でも使います。そこから、だんだん、より抽象的な意味になって、万物を構成する、気という元素のプラス、あるいは、マイナス。いわば、陰電気、陽電気。あるいは、今の物理学で言う、量子とかなんとか言うものの、二つの属性、という風な意味になる。これは、中国の宇宙論、中国人の世界観の根底となる考え方です。この陰陽思想というのが、易で確立して、それから後二千年の間、こういう考え方が、儒教の中を貫いてあった。これは儒教の中だけではありません。道教の中にもこの陰陽説は根強く存在しました。これはもう、中国の中では、普遍的な哲学であります。

さて、易経の、易という名前。これはどういう由来を持つか。これは、中国の明みんの学者の説でありますけれども、易という字の古い形は。何か、虫のような。この易の字に虫偏を付けると、「蜴とがけ」という字になります。二字で書けば、「蜥蜴せきとが」となりますけれども。蜴の字の旁、これは、トカゲの形象なんです。明の学者が「易」という字が、なぜ占いの書物の名前になったか、それを説明しまして、易の哲学はすべて変化、変易、変わるということを物語る。どう変わ



るかという、陰と陽、これは、固定しているものではありません。陰は、次の瞬間に、陽に転ずる事も有り、これは、しよっちゅう変わりうるわけです。易全体が、大宇宙の変化の相を、こういう二種類の棒で説明しているわけで、易という言葉は、変易の意味である。ところが、文字は、トカゲの象形である。なぜトカゲの形をした字が、変わるといふ意味になるか。その学者は、トカゲというのは、青い葉の上にとまれば、色が青く変わる。茶色い木にとまれば、茶色く色が変わる。そこから、色が変わるといふ意味で、変化の意味に、成り得たのだと、そういうわけです。これは明らかに、カメレオンを考えている。中国の南の方には、カメレオンが、存在した。昔の人もそれを知っておったわけで、色が変わるといふところから、変化といふ意味の、易の書物の表題とした。易といふ書名を、英訳しますと、ブック・オブ・チェインジズ (book of changes)、変化の書物というのが、易経の英訳。

それからまた、後漢の学者で、訓詁学くんごがくの大家であります鄭玄じょうげんといふ人は、さらに高度な哲学的な解説を付けておる。易経といふ書物の、易といふ字は、一字で、三つの意味がある。変易、変わるという意味が一つ。それから、不易、変わらないという意味が一つ。それから、三つ目に、簡易かんい。この場合、今では、エキではなく、イと発音しますけれども、一番古い時代は、イ、エキの使い分けがなかった。全部同じ音だったわけです。易は、変わる、変わらない、それから、たやすい、この三つの意味を、同時に含むという。確かに、この変わるという意味は、貿易とか、

交易とか、そういう場合の易は、変わる。それから、たやすいという意味。簡易とか、容易とかいうふうには、今でも使いますね。で、不易という意味だけが、これは今ではもはや使われない。しかし、鄭玄は、本来、この字には、変わると同時に、変わらないという意味がある、という。これは、漢字の中には往々にして正反対の意味を、一字で含む場合が有ります。「離」の字は、はなれるという意味と同時に、かかる、病気にかかるのかかるの意味であります。「離騷」という書物が有りますが、これは憂いにかかるという意味です。それから、「毒」という字。これは、人を殺す薬の意味のほかに、おさめるという正反対の意味を、一字で含むことがある。だから、あの変わるという字が、その裏に、変わらないという正反対の意味を含んでいた、そういう時期があったということ。これはまあ、確かに有り得る。

で、易の哲学というのはですね、これはだいたい、八卦、六十四卦、そういう象徴と、それから、数。これ、真中のつまっている棒は、九の数を、真中のわれた棒が、六の数を示す。それから卦をたてるためには、五十本の筮竹（せいちく）を操作して、その数で卦を出すわけです。易というのは、そういう象徴と数、そういうもので将来を判断する。で、易の作者はですね、大宇宙の動き、これは刻々に変化する。大宇宙というものを、変化の相において捉えます。しかしながら、そういう大宇宙の、日が昇り、また日が沈む。月が満ち、あるいは、欠ける。そういう大宇宙の、刻々の変化。その裏には一つのかわらない法則性というものが有る。で、そういう法則性、そのシ

ステム、これを知れば、その変化の相の中に、次の瞬間の変化、どう変化するであろうか、どう動くであろうかという、そういう予測というものは、たやすくできる。だから、変化という言葉、変わらないという言葉、それから、たやすいという言葉、これが易という一字の中に、共存し得ると、そう考えるわけです。

占いが、なぜ当たるかというと、これについては、易経の中の、繫辞伝という解説部分、これが、盛んに、こういう事を述べるわけなんですけれども。易の作者はですね。人間というのは、小宇宙であるという。人間、これは天地に象どって作られている。天地の間に生まれた万物の中で、人間こそが、いわば天の寵児である。最もかわいがられた子供である。人間の人体の構造、これは、漢代の儒者が言うのですけれど、五臓の五というのは五行に象どる。それから、人体に十二の大きな関節が有る、これは十二ヶ月に象どる。小さな関節は、三百六十有る、これは一年の日数に象どる。こういうふうに、人間の体すらが、そういう宇宙の構造に象どっているという。だから、人間の運命、小宇宙である個々の人間の運命、これはいかにも刻々に変化して捉えられないようではあるけれども、それは、大宇宙の法則性、つまり、星の運行、あるいは、日食の周期、そういうものが、その法則性さえつかめば、整然と予測できるように、人間の転変やまない運命の中にも、そういう大宇宙の法則性にも似た何らかの法則性が、裏に有るだろうと。その一番大きな法則性って言うのは、わりに簡単なことで、繫辞伝の中に、これ後世非常によく引かれ

る句ですけれども、

「積善せきぜんの家には必ず余慶有り。積不善の家には余殃よおち有り」

という。善を積む家には、必ず子孫にまで喜びが有る。悪を積んだ家には、必ず子孫にまで及ぶ災いが有るだろう。これがまあ、一番大きな原則。そういうあれが、原則としてある。その他、人間はですね、大宇宙の自然物と違いまして、悪い事に、多少とも自由意志を持つがゆえに、大きな法則性から勝手に自分で離れる、まあ、過ちを犯す可能性がある。そういう時に、筮竹の操作によって、おまえは、間違いかけてるとか、今、やろうとしている通りにやって良いとかそういう軌道の修正をしてくれる。それが易の働きだと、易とは、過ちを補う、補過ほかの書であるという……。

ですから中国の儒者は易を占いに使うと言いますが、これに色々な限定を加えておるわけで、たとえば道義上、どうしてもかくせねばならないと、まあ極端な例で言えば、祖国が敵に攻められて、危急に瀕しておると、そういう時に、家来たるものは、当然、死を覚悟して戦うべきであってですね、その事自体については占ってはいかん。ただその戦うにあたって、右から回って攻めたが良いか、夜襲したがよいか、いったん籠城したがよいか、そういう迷い、手段における迷いはあろう。大筋の道義においては、占う必要はない。ただ、そのやり方、方法論において、迷いがあつた時に、こうしてよいだろうか、自分の判断ではこう思うけれども吉か凶かという、

そういうあれで占うのだ、と儒者は素晴らしいです。

で、さっき、ちょっと説明しかけました、一つの易の卦の判断。卦の文句の例といたしまして、易経の最初に出てくる乾けんという卦。これは非常に良い卦、大吉の卦です。占ってこの卦が出たといいます。この卦全体の判断は「元おほいに亨とほる、貞ただしきに利あり」。元おほいに亨とほる。あなたただの願ただい事、その占う人の願ただい事は大いに通るであろうと。で、その後がおもしろいんで、ただし、貞ただしきに利あり。その人の心情というか、動機というか、それが正しい場合のみ、利益が有る。動機が正しいという、その事を条件とするというのです。以上が、まあ、この卦全体の判断。

この卦全体は非常に結構なもので、この人の運勢、だいたいにおいてよろしいとみななければならぬのですけれども、さしあたってその人の、今おかれているもつと細かい立場はどういうふうであるか。それを判断するために、この卦全体のうちの、下から数えて六つある、そのどの地位に自分がおるかということ、これも筮竹で出すわけです。

もしも一番はじめの棒が出た場合、その時の判断、「潜龍なり。もちいるなかれ」。天に昇る能力のある龍ではあるが、まだ地中にもぐっていないなければならぬ時勢である。この一番初めが出たら、その場合は、「もちいるなかれ」。というの、行動してはならない。動いてはいけないのです。この人の運勢全体としてはよろしいけれども、少なくとも今は、動いてはいけない。

もしも、下から二番目の棒が出た場合、「見龍げんりゅう田たに有あり」。見は現あらわれる。田たんぼの上に龍が

ヌツと首を出した。一番下よりは、時節がむいてきている。「大人を見るに利あり」。大人は立派な人、聖人。天下を平和にする、そういう聖人に巡り会うであろう。人事で言えば、自分をひきたててくれる人に会うだろう。この、大人を見るに利あり、これはまあ、良い判断。これがついているのは、二番目と五番目だけです。

三番目「君子は終日乾乾。夕べまで惕若たり。厲けれど、咎なし」。三番目という地位は、上半分と下半分の切れ目。下半分は下半分で独立した形になりますが、その一番上。ちよつと危ない。危険な地位にある。君子は終日乾乾、というのは、終日あくせくと努力して夕方までこれでよいのだろうかとうれえる。厲けれど咎なし、この地位にいと、多少の危険は伴うけれども、そういう風に努力し、反省する点において、とがめがない。

四番目、「或いは躍つて淵にあり。咎なし」。或いは、というのは疑惑するの惑と同じ意味で、登ろうか、下ろうか、まよつて、池の水面で、龍がしきりに飛び上がり、飛び下がりしているそういう形。とがなし、これも悪くはない。とがめはない。

それで、この卦のうち、一番良いのは、下から五番目「飛龍天にあり。大人を見るに利あり」。五番目こそは、龍が飛びあがつて、天に登つた形。自分をひきたててくれる人、中国風に言えば、天下を平和にする聖人、そういう人に会えるであろう。

さて、下から上にあがつていくんですから、一番上の地位が、一番良さそうに思われるんです

けれども、一番上の棒についている文句は、不思議なことに、この卦の中で一番悪い。「亢龍こうりゆうなり。悔いあり」。亢龍というのは、登りつめた龍。登りつめたということは、それより先、進歩がない。出世するあてがない。あとは落ちるしか手がない。だから後悔することがあるだろう。

これで見ますと、文句の判断の一番良いのが、下から数えて五番目。それと二番目が良い。六十四卦全部が全部それで貫かれているとは限らないんですけれども、だいたいにおいて、二番目と、五番目が良くて、一番上は、概して悪い。これは、中国の官僚の社会っていうのは、あんまり出世すると、総理大臣になってしまうと、後は、まあおっこちるしか、仕方ないんで、古代ではおっこちるだけでは済まんて、たいてい首がなくなる。だから一番上に昇るのは危険とされている。二番目と、五番目は、六本の棒から成る卦を上半分と下半分に分けますと、ちょうど真中になります。中の位ちゆうゐと申します。これの判断が、一番良いということは、非常におもしろいあれで、中国の書物に、孔子の孫に当たる人が書いた、「中庸」というのが有ります。旧制高校では、だいたい「大学」と「中庸」は読まされたと思うんですが、「中庸」という書物は、物事はほとんど、中位の所が、一番良いと言う。「過ぎたるは及ばざるが如し」とは、孔子の言葉で、ゆきすぎと不足と、これはどちらもいけないんで、中庸を守るという事が、一番大事だとされます。中庸という書物、これは易の「繫辭伝」とだいたい同じ時代に作られたと考えられる。中国人のものの方では、そういう中ほどが良いという。満ち盈みちりちるといふ事を忌いんで、過ぎるよりは、

まだ及ばない方がいいんですね。この乾けんの卦の文句を見ましても、下半分の一番上が三。三と一番下を比べると、一番下の方がいい。そういうふうには、いき過ぎというのが、一番中国人が忌むところであった。つまり、易の哲学、易の処世の知恵というものの、一番大事なところは、中庸を得るといふ事でありませぬ。そういう意味でせうね、易経といふ書物は、運勢判断、占いの書物だけでなくて、同時に処世の哲学を説いておるといふ事が言える。そういう意味で、大変おもしろい。

ここで一つ、卦のたて方を説明します。本筮の場合は、随分時間がかかるんで、略筮ですが、一般の易者のも略筮。略筮でも決してインチキではありません。本式の筮法を一部分省略したただけで、筮竹の操作自体の中に、一つの宇宙哲学、宇宙論というのが含まれています。筮竹の数は、五十本あります。五十というのは、天地の数、大衍たいえんの数と申しまして、万物を演繹えんえきする天地の働きを、敷衍ふえんした数が、五十。この五十というのは、説が色々有りまして、十干、プラス十二支、プラス二十八の星座。これで五十になります。また、天の数は五。天は陽、陽は奇数ですから五。地の数は十。地は陰、陰は偶数ですから十。それを相乗した数だといふ。とにかく天地の数が五十。五十の中から一本だけ抜き出して、これは始めからしまいまで使わない。それは、太極に象どる。易の古い注釈によりますと、「太極とは無の謂いなり」と。すなわち、天地以前の無。世界は無から有が生じて出来た。その天地以前の無に象どって、これははじめからしまいまで使わ



ない。五十本あるけれども一本だけ抜いて四十九本でやる。まず何事かを、例えば、私自身の運勢でもよろしいんですが、占うといたしまして、四十九本を二つに割る。これは天地以前の無から、初めて天地が分かれたかたち。右が天。左が地です。これで天地が分かれました。右のぶんを下におきまして、右の一本を左の小指にかける。これは、天と地の間に人が生まれたかたち。天地人。ここからあと、本筮ですと、四本ずつ勘定するんですけども、略筮ですと、八本ずつ数える。四といひ八といひ、一年の季節の数、またはその倍数である八本ずつ取っていきまして、ここで八未満の数だけがここに残るわけです。そして、この残数は、何に象どるかと申しますと、これは一年十二箇月の余り、閏うるふに象どるわけです。これに小指の一本を足しまして、その数で卦が決まる。今、四本残ってますから、震二二になる。これで下半分が出た。書物によっては、最初に出た卦を上半分とするといひますけれども、これはあまり良くないと思う。易の卦というのは、下から上に見ていくんですから。もう一回四十九本を用いまして、真二つに割る。天と地が分かれる。それから一本を小指にかける。これで人。八本ずつ取る。今度は三本残りしました。離二二。これが上半分。つまり三三「筮嗑」。えらい悪い卦が出た。筮嗑とは嚙むという意味。女に嚙みつかれる可能性が有るかもしれない。

卦全体の判断はですね、文句自体は、あまり悪くはないんですけども。判断の文句は「筮嗑は亨る。獄ごくを用いるに利あり。」これ、自分が支配者として、罪人、悪人を懲罰する、そういう

地位にある人だったら、この卦が出たら、悪人を、ばくつと噛んで、噛み殺すという意味で、そういうところに使うには、この卦はいいんです。けれども、そういう地位にない、支配者でも何でもない、一般庶民が占って、この卦が出たら、これは、自分が噛まれると、そう思った方が間違いないんです。あと、六本の棒に付いてる文句が全部そういう、足枷に足を噛まれたり、それから、自分が肉をばくりと噛んだら、カチリと肉の中に金属が有ったり、とかいうので、噛むという名が卦についた。ところで下から何番目の棒が、自分の今のシュチエーションであるかというのが問題です。今度は、六本のうちのどれかですから、今度は同じ操作をして、二つに割って小指に一本かけて、あと六本ずつ数える。そうすると、これのうちのどれが、自分の今の運勢であるかがわかる。さて、六本残りました。ということは下から六本目。一番上というのは、さっき申しましたように、あんまり良い地位じゃありません。この文句は非常に悪い。「校かせを荷にないて耳を滅す。凶」とある。校とは首枷。罪にかかって、首枷を首のところに荷って、それでもって耳を潰したという。この上ない凶。私はそういう犯罪は犯すつもりはありませんけれども、帰りに交通事故ぐらい……。今日の帰りはなるべく酔わないように、大人しく帰ることにします。

こういうふうなのが、だいたい卦のたて方であり、判断の仕方である。これで判断の文句は、一応大凶ですけれども、この裏をみるという方法がある。裏卦うらけという。心を入れ換えて、身を慎しんだら、さきの判断が今度どういふふうに変化しうるかということです。先の卦を、陰と陽

を全部テレコにしてみる。逆にしてみる。そうしますと、**二二三**になる。「井<sup>せい</sup>」という卦。これは幸いにして割合に良い卦であります。井、これは、文字通り井戸です。下が木**二二**で、木のつるべで水**二二**を汲み上げる。井戸は万人を養うものなので、この卦には賢人を養うという徳がある。これに付いておる文句。ちよつと難しいですけれども。「井<sup>せい</sup>収<sup>くみと</sup>つて、幕<sup>おほ</sup>うことなし。孚<sup>まこと</sup>あれば元吉<sup>げんきつ</sup>」。昔の井戸には屋根がありません。ただ地べたに、穴を掘っただけで、使わない時は、汚れた物が入り込まんように幕で覆いをしておった。ところが、この井戸の場合はですね、水がいくらでもこんこんと湧き出るので、あらゆる人に井戸を開放して、あらゆる人に水を汲ませるようにして、井戸の覆いすらしてない。ということは、つまり、あらゆる人、できるだけ多くの人に、恵みを施そうという意図を示す。賢者を養うという卦ですから、あらゆる人に、親切を施すように心がけよという。「孚<sup>まこと</sup>あれば、元吉<sup>げんきつ</sup>」。本人に誠があれば、おおいに吉であろうという意味。したがって、最初出た卦は、何か非常に悪いあれでしたけれども、この卦を見て、心を入れ換えて、万人に親切を施すように努力すれば、吉になる。悪い運勢が、良い運勢に転ずる可能性があるという。

易の運命観というのはですね、さつき、「過ちを補うの書物」、という定義を、紹介致しましたように、運命というものは、自分のところがけで、変える事ができると言う。これがまあ、ギリシア悲劇なんかの運命観とは違うんです。中国人の運命観は。自分のところがけで、こころを入

れかえたら、運勢も変わるという。それを前提としてですね、こういう筮竹の操作による占断、これが過ちを補うということの一つの手段として用いられる。そういう点で、易という書物は、あらゆる意味でいかにも東洋風な、処世の知恵であり、それから運命の哲学でもある。町の易者が多く用いるテキストは、高島易断あたりのテキストでして、いかに卑俗なようでありましても、一番もとは、ちゃんところという原典にのっとっているんです。ただしですよ、そういう倫理性ということになりますと、だいたい占いをみてもらいに來る人は、説教なんか聞きたがらんで、ただまあ、儲かるかとか、良い男がつかまえられるかとか何とか、結果だけを聞きたがるもんですから、教訓性というものを、捨象しゃしやうしてしまふ。それでは易の効用というのは、半分以下になつてしまふ。やはり將來への教訓というか、そういう性格を忘れてはならない、と思うのであります。はなはだとりとめのない話を致しましたが、これで終りと致します。

(梅花女子大学長・大阪市立大学名譽教授)